

京都大学教育研究振興財団助成事業 成 果 報 告 書

平成27年3月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 教 授

氏 名 吉 田 豊

助 成 の 種 類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 研究成果物刊行助成			
研 究 成 果 物 名	中国江南マニ教絵画研究			
著者・編著、作成者全員の所属・職 ・ 氏 名	文学研究科教授・吉田豊(主編集), 大和文華館学芸員・古川攝一(副編集)			
学術書・論文集等について	出版社・印刷会社等名	発行年月日	配 布 先	
	臨川書店	2015年3月31日	関連研究者および絵画の所蔵者	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。合わせて、刊行・作成された研究成果物をご提出(ご提示)下さい。			
会 計 報 告	事業に要した経費総額	3,151,064 円		
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 公益財団法人 鹿島美術財団		
	経 費 の 内 訳 と 助 成 金 の 使 途 に つ い て			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	組版代	1,155,137	800,000	
	製版代	250,300		
	刷版代	275,000		
	印刷代	432,500	100,000	
	用紙代	440,215	100,000	
製本代	364,500			
消費税	233,412			
合 計	3,151,064	1,000,000		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 非常に実質的な助成制度で今後ともこの制度を維持していただくように強く希望いたします。			

成果の概要／吉田豊

マニ教は、マニ（216-274/277）がメソポタミアで唱道した宗教である。当時この地域で流行していた、キリスト教に基づくグノーシスの宗教をベースにはしているが、それらとは決定的に異なり、ゾロアスター教の二元論等を取り込んだ普遍宗教を目指していた。マニは当初から教会組織を整え、積極的に布教活動を行った。そしてマニの生前既にササン朝の領土以外に、西はエジプトやローマ世界に、東はインド西部やシルクロード地域へも伝道使節を送った。布教に際しては、教義を伝えるために絵画を使う事が教祖マニ以来の伝統であった。しかしながら、マニ教衰退と消滅の結果、それらの絵画は中央アジアのトルファンで発見される小断片を除いて、今に伝わらない。

中国では唐の時代の始めにマニ教は伝わったとされている。当時華北では一定の信者を得たようであるが詳細は分からない。8世紀後半から9世紀にかけてモンゴル高原で勢力を持ったウイグル可汗国は、安史の乱で国力が衰退した唐に対して大きな影響力を持ったが、マニ教はそのウイグルの国教になったこともあり、この時期には中国各地にマニ教寺院が作られた。しかしウイグル可汗国崩壊後は、所謂会昌の法難の犠牲になり、9世紀（西暦843年）に華北で厳しい弾圧を受けた。その時信者の一部は福建に逃れそこで布教した。その後福建から江南地方全域に信仰は広まった。この地ではマニ教は明教と呼ばれ、多くの信者がいた。南宋時代、菜食主義者の彼らは「喫菜事魔」と呼ばれ為政者からは農民反乱の首謀者と見なされここでも弾圧された。しかしながら彼らの信仰は根強く、福建では実に20世紀初めまでその伝統は生きていた。

江南のマニ教徒については、主に南宋時代の記録が残っているが、それによれば、宗教文献や絵画を信仰のよりどころとしていたことが知られる。しかるに、明代以降も続いた厳しい弾圧の結果それらの文献や絵画は失われ今に伝わらないと信じられていた。ところが2007年になって、筆者は我が国にこの江南で制作されたマニ教絵画が2点伝損していることを発見した。そしてそれをきっかけにして、その後もいくつかの絵画が発見されことになった。

『中国江南マニ教絵画研究』と題する本書は、近年日本に現存することが確認された8点のマニ教絵画の図版を提出するとともに、それらに関する内外の5人の研究者の研究をまとめたものである。これらの絵画はその様式から、中国の寧波画との関連が指摘されている。上述したように、江南地方には多くのマニ教徒がいたことが知られており、これらが江南のマニ教徒が関与した作例であることは疑いがない。現在までの研究で、元代から明代にかけての時代の作品だと推定されている。とりわけ外来の宗教に対して寛容であった元の時代には、マニ教も弾圧されていなかったことは注目される。その時期にはマニ教徒が本書で発表したような絵画を製作することを許されていたと考えられ、様式論にもとづく年代推定と矛盾しないからである。本書のタイトルのなかの「江南」はそのような背景から選ばれたものである。ちなみに本書で発表するのは以下の8点（都合9件）の絵画である。

- (1) マニ教の個人の終末論の図 (大和文華館所蔵「六道図」)
- (2) マニ教のイエス像 (栖雲寺蔵「伝虚空菩薩像」)
- (3) 宇宙図 (個人蔵)
- (4) 天界図 (2断片：A 及び B；個人蔵)
- (5) 聖者伝 (1) (個人蔵)
- (6) 聖者伝 (2) (個人蔵)
- (7) マニ像 (所在不明)
- (8) 摩尼誕生図 (現九州国立博物館蔵)

これらの絵画は、そこに描かれた内容や様式に関する最小限の論考が、写真版を伴ってすでに発表されている。しかしそれらの絵画が一举同時に発見されたわけではなかったこともあって、いくつかの場所に分かれて論文が発表されているだけでなく、発表後にも新しい提案がなされている。そこで現在までに発表されている論考と新しい発見を、ここに一冊の本としてまとめた。そのことの意義は小さくないが、本書を出版した何よりも大きな意義は、マニ教研究にとってきわめて貴重なこれらの絵画を、日本も含め世界の他の研究者にとって利用可能にすることができたことにある。というのもこれらの絵画は極彩色の細密画であって、全体を大写しにした写真では細部を確認できないからである。先行する研究は雑誌や論文集に掲載された関係で、限られたテーマを扱い、提出された図版は絵画全体の大写しとテーマに関連するごくわずかな部分のクローズアップだけであった。そしてそのクローズアップも多くの場合、モノクロの図版であった。将来内外の研究者がこれらの絵画そのものや、絵画に描かれた内容と文献で伝わっているマニ教の歴史や神話とを比較しようとするときには、その研究に耐えるだけの精密さを備えた写真版が、各絵画の全体について利用できるようになっていなければならなかった。本書を刊行する最大の目的はそこにあったのである。

本書は、序文と写真版をのぞく全体が3部から成り立っている。第1部では、マニ教についてあまり詳しくない日本の読者のため、編者である筆者が、マニ教の教義や歴史に関する基本的な事項をまとめた。ここに発表する絵画の内容やそれらの成立の背景を理解するためには、マニ教の宇宙論や、シルクロードおよび中国へのマニ教伝播についての知識は不可欠であるからである。第2部では、これらの絵画がマニ教画であることと、マニ教の教義やマニ教教会の歴史との関連を明らかにした筆者の研究を主に収録した。とりわけ「宇宙図」と呼んでいる絵画は、マニ自身が描いた絵が、シルクロードを経て中国の江南に伝わるまでの、千年以上に渡って写し伝承されてきたものと考えられ、もはや存在しないとされてきた絵画である。ここにはトルファン出土のマニ教絵画との関係など、江南のマニ教画との関連で派生したテーマを扱う論考も含まれている。

第3部では、美術史の研究者である古川撰一 (大和文化館学芸員)、泉武夫 (東北大学文学研究科教授)、Zsuzsanna Gulácsi (Northern Arizona University 比較文化学講座教授) の研究を収録した。泉は近年のマニ教絵画発見のきっかけとなる重大な貢献をしているが、ここでは発見

の経緯や「イエス像」の中国美術史における位置づけを論じている。古川はマニ教絵画の1点を所蔵する大和文華館の学芸員として、当初から一連のマニ教絵画の研究と関わって来たが、日本の仏画とも共通する聖人の絵図という観点からマニ教絵画を分析している。古川はまた美術史の立場から本書の編集の作業を分担した。Gulácsi はトルファンで出土するマニ教絵画の世界的な権威で、日本のマニ教絵画をマニ教絵画の歴史の中でどのように位置づけるかについての論攷を寄稿している。第3部にはこの3人の論考以外に、ハンガリーの ELTE 大学の中国学教授で漢訳マニ教教典の専門家である Kósa Gábor の最新の論文も掲載した。Kósa はマニ教絵画のなかの「宇宙図」の構成部分の解釈についての論文を3本寄稿した。